

# 和のインテリアテキスタイル

## 第4回

### きんからかわ 壁紙(金唐革紙)

大妻女子大学 キャリア教育センター

教授・博士(工学) 平井 郁子

## 1. はじめに

古来日本の住宅は、紙と切っても切れない関係にあった。障子や襖で間仕切りし、空間を小さくしたり、大きくしたり、調節をしながら暮らしてきた。西洋の住宅様式が入って来るとともに空間を壁で仕切る固定した空間が多くなり、それと同時に私たちの住宅の内装の壁も漆喰壁、土壁のような塗壁、その後、塗壁に壁紙が貼られるようになった。西洋から壁紙がいつごろ日本に入ってきて、用いられるようになり、私たちの生活に定着していったのかを調べていくうちに、金唐革紙が大きな位置を占めていたことを知った。本文では金唐革紙が現存、あるいは復元されたものを調査することにより、日本の住宅のインテリア材料としてどのように扱われ、そして衰退していったかを報告する。

## 2. 壁紙の歴史

ヨーロッパにおいて室内装飾<sup>1)</sup>として用いられた最初のカバリング材は、皮革だったと考えられている。その後、タペストリーなど織物が用いられた。紙は105年に中国の蔡倫によって発明されたが、壁紙の起源も中国の唐代(615-907)に盛んに描かれた壁画(紙に絵を描いて貼る宮廷壁画)と言われている。中国の抄紙技術は8世紀にアラビアへ伝えられ、11世紀にヨーロッパへ伝えられた。同時に壁画の技術も伝えられたとされている。11-13世紀に連続抄紙技術が開発され、ブロック印刷(木版)による壁紙が作られるようになった。15世紀になると紙を壁面に貼ってから型紙(ステンシル)を置くハンドペインティングするものとなった。17世紀にはステンシル印刷の色刷りの壁紙の誕生、花柄のデザインを連続させた木版多色刷りの開発もされた。

18世紀産業革命以降、抄紙や印刷技術が進歩を遂げ、工業化による壁紙の大量生産が可能になり、壁紙が安く

供給されるようになった。19世紀に入るとイギリスでは工業化製品に対する反動から昔の職人技術が見直され、新しい工芸運動が提唱された。アーツ・アンド・クラフツ運動の指導者であるウィリアム・モリスによってデザインされた壁紙は、幅広く支持され、現在でも昔ながらの方法で生産されている。

日本も同じく中国の壁画から平安時代の障壁画が生まれている。日本の貴族の邸宅である寝殿造はヨーロッパの建築様式と異なり壁が少なく、柱と柱の間仕切りとしての障子(現在の襖)が用いられるようになり、障壁画は、この障子や屏風・衝立などの室内装飾画として発展した。

その後、日本の壁紙<sup>2)</sup>は、1880年(明治13年)に大蔵省印刷局がフランスから設備を導入し、和紙をベースにした金唐革紙を製造した。豪華で東洋的な雰囲気が欧米人に好まれ、製品のほとんどは輸出品であった。それとは反対に明治の洋風建築用には、ヨーロッパ調の壁紙が輸入された。国内需要を期待するヨーロッパ調の壁紙製造は、一般住宅の洋風化を促した。関東大震災の復興需要を狙って、関西では壁紙の製造も開始されたが戦争により中断された。第2次世界大戦後の壁紙は、戦前の壁紙が志向した装飾的要素から離れ、内装仕上用の建材として発達し、デザインよりも材質や機能を重視したものとなった。

## 3. 壁紙の種類と生産量

壁紙が大量に使用されはじめたのは、高度経済成長のビル建設がきっかけである。また、壁紙が住宅に多く採用されるようになったのは、内装下地として乾式工法の石膏ボードが用いられたことによる。明治から戦前までの壁紙はインテリア内装材として装飾的要素が大きいものに対して、現在の壁紙はあくまでも壁面を仕上げる材料として機能性を重要視した建材的な要素が大きい。

壁紙<sup>2)</sup>とは、シート状で可撓性があり、壁・天井面な